
蝶の羽音

綾瀬昂夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶の羽音

【Nコード】

N3538K

【作者名】

綾瀬昂夜

【あらすじ】

ふわふわとして掴みどころのない、現実味のない少女と、現実主義の忘却を続ける少年。失ったものは何か、忘れた心はどこにあるのか。

気づけない二人の、すれ違う幼い恋物語。

はじまり

それは、重々しい音色か。

もしくは、鈴の音のように軽やかか。

誰も、知らぬ音色だとしても。

聞こえなくとも、絶え間なく。

届かないほど、微かに。

確かに確かに、響く音色。

誰そ、彼のためだけに。

咲き誇りたるは、脆弱な羽虫に過ぎぬが色鮮やか。

顔前をひらひらと舞い浮かぶ、蝶の音色。

『蝶の羽音』

ねえ、君には聞こえない？

誰にも聞こえない音。聞こえるとしたら、それは。それは。

微かな微かな、君を呼び続ける、声。

ひらり、ひらり。

はじまり、はじまり。

夕暮れの教室から

「陽ちゃあん。帰ろ？」

視界いっぱい、茶色の波が降ってきて。
顔のドアップがきた。

ここは教室。放課後、残ってるのは俺達だけ。

そんな中でこんなことするコイツは、本当に危機感がない。
俺は男で、色々真っ盛りなお年頃で。コイツ…紫宮^{しのみや}光だって、学年
問わず男子に人気がある女なのに。
実際問題でいくと、俺がミツを好きなやつらにやつかまれて絡まれ
たってとこなんだけれど。

まあ、幼なじみに今更かもしれない。

ミツは気にするようないし。

「帰るか」

「ん」

はい、と手が差し出される。

俺が立つと胸くらいまでしかないミツと、手を繋いだ。

ミツは、手を繋ぐのが好きだ。

俺がそれを受け入れているのは、昔からの習慣。
ベビーベットから一緒に育った仲だしな。

夕暮れの中、土手を歩いて家に帰る。

マンションの、隣同士の部屋。

その一歩手前で。

ミツが抱きついてきた。

ミツが精一杯、背伸びする。

その姿が哀れで、俺はほんの少し——本当にほんの少しだけ、屈んでやる。

唇が触れ合う。

それだけの、ただの現象でしかないキス。

「じゃあ、ようちゃん、また後でねえ」

笑って手を振り、ミツは部屋の中へ消えた。

ミツは、抱きつくのと、キスが好きだ。
手を繋ぐのと同じように。

何の意味もない。

それより、後で、というのが気になった。
また…そう、また、ミツは俺の家へくる。
ミツといたくない時間の方が短くなりつつあって、
げんなりしながら家の扉をくぐった。

懐古

ミツはいつもふわふわしている。何を考えているかわかりにくいし、人と合わせるということができない。いつも笑っていて、余計に掴み所がないけど、嫌われるわけでもない。

俺はそんなミツを見ていると、たまにイライラして、たまに安心して、そして、いつもどおりだと日常を思う。

部屋に入って、机に鞆を置く。

学校のロッカーにほとんどの教科書は入っているせいで薄い鞆。はぁ。

自然にため息をつくことが癖になっているのに気がついて、また一つため息をついた。

『幸せが逃げてしまっわよ?』

死んだ母親の声がよみがえる。

幼いころから苦労性だったのか、ため息の多かった俺に、よく母親は微笑んでそういった。

俺も大概嫌なガキだったが、母さんも結構おかしな人だった。

少し、ミツに似てるかもしれない、と。

かすかに浮かんだ考えを、強く消した。

理由は知らない。

団地に住んでるうちでも置ける小さな仏壇には、二枚の写真と、位牌と、なんでか派手だと俺は思う布に入れられた、小さな二つの骨

壺。

「ただいま、父さん、母さん」

俺は毎日の日課、ただいまの挨拶を二人にする。

自己満足でしかないって、わかってはいるんだけどな。

俺の父さんは、俺が生まれたすぐ後に事故でなくなったらしい。

母さんは、俺が中学二年の春に、病気でこの世を去った。

もともとあまり身体の強い人ではなくて、お嬢様って雰囲気かぴったりの人だった。

小さいころ、母さんに本を読んでもらうたび、「お姫様っていうのは、きつと母さんに違いない」って思ってたくらい。

それだけ、儚い感じではあった、と思う。

いつもにこにこ笑っていて、でも叱られるとすごく怖かった。

何がどう怖いって、滅多なことじゃ怒らないのに、俺が自分でどう悪いか、思い知らせるまで徹底的に思い知らされた。

怒鳴ったり、叩いたりするわけじゃない。

ただ、身をもって・・・自分がやったのと、同じ状況に置かされた。母さんは、そんな時でも、笑顔なんだよなあ・・・。

思い出して寒気のしてきた俺は、さっさと立ち上がって、キッチンに向かった。

父さんと母さんがいなくなってから、俺は父さんと母さんが暮らして、俺が生まれた時から住んでいる団地の一部屋に一人暮らししている。

父さんには父さんの死んだ父と母の遺産があって、さらにそれに父さんの保険金もきたから、うちは遺産で金に困ったことはなかった。

母さんも母さんで、なにもいわなかったけれど保険と、その他にかわらないけれど桁の違う額が入った通帳が残された手紙と共にタンスの引き出しから出てきて、遺産だけで結構な金持ちだと判明した。

そんなの、いらなかったりするのだけれど。

ついでに、ミツの家は母親は小さいころなくなっていて、親父さんは海外出張中。そろそろ年単位だから、転勤なんじゃないのかといいたいが、本人は決して認めようとしない。

たまにしか帰ってこれないが、帰ってくるたびにミツと俺に抱えきれないほどのプレゼントと、ぎゅうぎゅうと抱きしめてくれる。優しい、大きな人だと思う。

そんな家族同士の俺とミツは、家は隣同士、生まれたときから一緒にいる幼馴染。

現在は、俺は親をなくし、一人暮らし。ミツも親父さんが帰ってこないから、ほぼ一人暮らしで、半分以上一緒に住んでるといっても過言ではない。

イイ暮らししてんな、とやかみ交じりにからかわれることもあるけれど、正直、俺とミツは青春とは程遠い、ジジイとババアのようなと思う。

二人しかいないから一緒にいる。そんな状態なんだと、俺は思っている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうして帰ってきてまで、こんなことを考えているんだ自分。しっかりしろ自分。

なんだか寂しい、墓前を思い出した気分だ、疲れた。

とつとメシを作ってしまったおうと思っていたが、気がそがれてなんだか落ち込む。

こういうときは、寝てしまうに限る。

幸い、まだミツもきていないことだし。

子供の頃から使っている、木目のでた木のベッドにダイブして、目を閉じた。

眠りのさざ波

「・・・ちゃん」

「も・・・いよ」

「もう、い・・・いんだよ」

「ようちゃん」

柔らかい声。

俺を呼ぶ声。

知っている声。

あの時の。

ミシの、声。

どうやら俺は、夢を見ていたらしい。

ふ、と意識が浮上する感覚。

眠りから目覚めるのは、どこか潜っている水から、顔を出すのに似ている、と思う。

しかし、なんか重い。身体が動かない。起き上がれない？

霊感なんかこれっぽっちもない俺は、金縛りもあつたことなどない。とりあえず首だけ動かして、身体を見てみた。

腹の上に、なんか乗ってた。

乗ってるをより正確にいうと、張り付いていた。

化け物系の何かではなく、それは見慣れた存在。

「ミツ、重い」

うう。とか唸ってるミツは、ちつとも動く気配がない。

こうなってしまうと長いのを経験で知ってる俺は、諦めて力を抜く。

絶対、ミツのせいであんな夢を見たんだ。

それについてどうこういう気はない。

ぼす、と、ミツの頭に手を置く。

ふわふわとした、やわらかい髪。

さわり心地がよくて、つい玩んでいると。

「うんー、よおちゃん？」

何時にも増して舌足らずにいつて、ミツが俺の上で起き上がった。
ミツは異様に細いから、耐えられないほどじゃないけれど、さすがに腹の上に座り込まれたら重い。

「ミツ、のけ」

「うう？」

理解してないだろうミツを、足でどかす。

ころん、と転がったところを、ベッドから落ちないように、片手で支えてやる。

ミツは何がなんだか、さっぱりわかっていない模様。

起き上がった俺の手に支えられていたのに、今度はぺたり、と胸に倒れてきて張り付いた。

「ミツ、邪魔」

なにしてんの、と俺がいうと。

「あつたかい、からー」

ほわほわと、ミツがいう。

まだ眠っているようなミツは、いい毛布代わりを手放したくないらしい。

「飯、作るから」

「私が作るう？」

ミツは意外に料理が得意だが、いかんせん普段からふわふわとしていてなんだか危なっかしい。

見ている俺の方がはらはらすることが多い。

俺はというと、料理は嫌いじゃない。

小さい頃から、慣れていたせいもあるんだろうな。

「いい。いいから、よける」

「そ、う?」

「俺が腹減った」

俺がミツを引き離すと、むう、とうなったけれど、それ以上反論せず、おとなしく俺のベッドに横たわった。

「よおちゃんのおいがするー」

すん、と鼻を鳴らして、ふわり、とミツが無邪気に嬉しそうに笑った。

はだけたスカートから、やけに白い足が太ももまでのぞく。

それを見た俺は、見てしまったというなんだかよくわからない罪悪感が湧き上がってきて、ミツから目を背けて、部屋を出てキッチンに向かった。

「飯のじかん」

向かった、なんていっても、俺の数歩の距離しかないのだが。

小さな、一家族用の団地の部屋。

廊下から真っ直ぐ突き当たって、リビングとつながったキッチン。

その他に部屋が二つ、母さんと父さんの寝室だった部屋と、俺の部屋。それに、トイレと風呂。

それで終わりの、小さな俺の家。

俺の身長は団地サイズから抜きん出ていたが、別に困るわけでもない。

今はもう慣れて、鴨居に頭をぶつけることもなくなった。

・・・成長期の頃は、あちこちぶつかっては壊していたが。

考えながらも手は勝手に動いて、冷蔵庫の中身で適当に料理を作れる。

昨日買ったナスがあるから、ナスの肉詰めしよう。

家のことはなんでも母さんと一緒にやっていたからか、料理のレシピも母さん仕込。

一番の得意料理は、オムレツ。

母さんから教えてもらった中で、ミツが一番好きな料理。

あれは、単純だが一等難しい。俺も、ミツがねだるたびに練習して、やっと作れるようになった。

・・・と。

考えているうちに、俺は考えていなかった分のオムレツまで作っていたらしい。

ミツが喜んで食べるだろう、と考えてよしとする。

「ミツー、飯だ」

普通に声を出せば、全ての部屋に聞こえる家。

寝てるかと思いきや、もそもそとミツが毛布を手に持って出てきた。置いて来い。

置かれたテーブルとイスのセットに座って、ミツが待っている姿勢。手伝おうという気は、欠片もないらしい。

来ても邪魔なので、座ってくれたほうがいいのだが。

その姿は、なんだかおとなしいのにどこかそわそわと、自分のご飯を待つ猫のようで、俺は苦笑した。

ミツは軟体っぽくて、猫っぽい。猫は軟体じゃないんだけど、あの柔らかくてあったかい、毛皮の身体に似ている。

ふわふわとして掴みどころのない意識は、俺にはよくわからないが。

テーブルの上にナスの肉詰め、茶碗に盛った白米、中華風に仕上げた卵がゆらゆら浮かぶ隠し味がラー油と醤油のスープと、バンバンジー。

今日の料理は中華風に攻めてみました。

我ながら、いい出来です。

『いただきます』

二人、食卓に向かって手を合わせて声を合わせた。

これは、昔からの決まりごと。

母親いわく、

「一人でご飯を食べて、どこが美味しいっていうの」とのこと。

もくもくと食事を口に運ぶ。

ぱくぱくと進むミツの箸のスピードを見ると、どうやら今夜は俺の予測通り、いい出来らしい。

密かな満足を味わいながら、俺も自分の前に並ぶ料理を片付けることに専念する。

うん、美味しい。

やっぱり、日々の食事は美味しいほうがいい。

ミツが、金色オムレツに、箸をつける。

俺のほうからは遠い位置にあるそれは、もうミツの目の前にあって絶対に手放す気がないという、小さい子の主張みたいだ、と心の中でつぶやく。

そのために作ったから、いいんだけど。

なんだか、ちよっと思うところがなくもない。

弾力を持つそれを、ミツが割り崩し。

口に入れる。

ふわり、とミツが笑った。

嬉しそうな、幸せそうな、あったかいみたいなの、とにかく心からの笑顔だった。

ミツのそんな顔は、昔から変わらない。

ただ、そんな一番の笑顔を作れるのは俺だって、俺は知ってる。

密かな満足が、さらに満たされて。

俺も満足して、食事に励んだ。

食事も、後片付けも（皿洗いはミツがやってくれた。ぼうっとしていたのか、皿を一枚とグラスを一個割った）終わり、テレビをつけながらもあまり見ずにそれぞれだらしてしていると。

片付けを終えたミツが俺の座るすぐ横に座った。

テレビの騒音が苦手なミツのために、ボリュームを絞った。見ていなくてもないのだし、消せばよかったかな。今更か。

ミツが言葉にしない礼で、微笑んだ。

特別、何かを話すわけではない。何かをしているわけでもない。軽く手を伸ばせば触れられる距離。

意識がミツに向く。

視線に気づいたように、ミツがふんわりと笑う。

なんだか、平面の写真を相手にしているかのような、なんともいえない感覚が俺を襲う。

苦にならない沈黙。腹もいっぱい、眠くなるような惰性。

ミツはなんで笑うんだろう。

ふ、とそんなことを考えた。

「ようちゃん。私、そろそろ戻るね」

10時半頃になって、ミツがそういった。

そろそろ、明日の準備と寝る準備をする時間だからだろう。

「おー」

適当に返事をしながらも、俺は送るべく立ち上がる。

なんでこんなに律儀に育ったんだ、俺は？と思わなくもないが、俺の中の意識は、俺が寝ていることをよしとはしない。

これも、母さんの教育の賜物だろうか。

玄関までくると、「ここでいい」とミツが淡く微笑む。

確かにすぐ隣はミツの家で、ここからいつでも一秒もかからない。

ミツが、抱きついてくる。

ぎゅう、という力も込められていない、ぼす、と音がしそうに軽い

身体が、しな垂れかかってきた程度の出来事。

ただ、甘い香りがした。

ミツの匂い。

そのまま、背伸びをしてミツが俺に口付ける。

ちゅ、と軽い音を立てて、すぐに離れたそれは。

また、弧を描いて、俺にいった。

「またね、ようちゃん」

ばたん。

玄関の扉が閉まり終わって、空気を振るわせた音が聞こえなくなつて、空気の震えもなくなつて。

そうして、ようやく、俺は動き出せた。

なんなんだ、いったい。

腹の中がもやもやする。

ミツがキスするのは、今に始まったことじゃない。

ずっと前からだし、幼稚園くらいからの習慣のようなものだ。

ミツはキスが好きなのだ。

そう、それだけ。

だから、俺が気にする必要はない。

ただ、引つ掛かりが、ある。

それがなにかわからないから、余計にイライラする。

俺はため息一つ吐いて、その考えを投げ捨てた。

考えたって仕方がない。

とつと風呂に入って、寝よう。

明日も学校に行かなければならないし、風呂にでも入って、寝て起きたらさっぱりするだろう。

俺は、風呂場に向かった。

—それは、無意識の忘却—

日常

翌朝、ミツと一緒に学校へ向かう。

朝は三割り増しでミツがふわふわしているから、気をつけてやらな
いといつの間にかいなくなっていたり、転んでいたり、とにかく
危ない。

俺が考えている間にも、ミツはふらふらと人垣に進んでいく。

「ミツ」

呼んで、引き寄せた。

あんな人垣に突っ込んだら、ミツはしばらく帰ってこないだろう。

そうになると、学校は完全に遅刻だ。

少し犬や猫を散歩させている気分になりながら、ミツの手首を掴ん
だ、引っ張る。

掴んだ瞬間、どきりとした。

細い、細すぎる手首。

このまま、ほんの少し力を込めただけで、簡単に碎けてしまいそう
なほどに。

「……………よう、ちゃん？」

ミツが、どこか不思議そうに俺を見上げた。

ミツは、俺がどこか違うことに気づいたのだろうか。

いいや、違う。急に掴まれて、驚いただけだ。

ミツは人垣に突っ込んでいつていることなんて、自分で気づいてな
いし。自覚症状はいつでもない。俺も期待なんてしてない。

どうしてだろう。俺は、夏の最中に、不思議に冷たい空気に触れた

ときのような。

薄い、氷の上を渡っているような、とにかく。

寒いような、冷たいような、腹から凍えていくような。

そんな気分を、俺は初めて味わっていた。

わけがわからない。

なんなんだ。これは。

——未来の俺が断じたならば、それはきっと「恐怖」という名の感情だった——

「ようちゃん」

先ほどより幾分はつきりとした、今度こそ疑念の込められたミツの声。

「いくぞ」

遅刻する、と大義名分を主張してみたものの、逃げたと俺自身わかっていて。

なんで朝からこんな気持ちにならなければならないんだ。

釈然としないまでも、苦々しく思いながら俺は先だつて歩き出した。すぐに後ろでミツの「あうっ」という声が聞こえて、急いで振り返ることになったけれど。。。

本当は校門で別れて、といきたいところだけど、ミツがこの間段差に足を引っ掛けてすっ転んで頭打って保健室に運ばれ俺が呼び出されたせいで（俺がミツの保護者扱いされている。やめてくれ）同

じ階だし、教室まで一緒にいくことにしている。

「じゃあ、な」

「うん、また放課後に」

いつて、お互いの教室に入った。

俺のクラスはミツのクラス——3・Hから二つ離れた、3・F。

まあ、比較的近いし、3クラス合同の体育だったりすると、一緒になる。

だからといって、何かをするわけではないのだが。

「よーお。見てたぜえ？相変わらずのラブラブっぷりだな」

「だまれ馬鹿」

クラスに入ったとたんに、押し掛かってくる重み。

それを邪険に振り払いつつ、俺はその重みに向かっていつてやった。だいたい、ラブラブとかいつてて恥ずかしくないのかこの馬鹿は。

「うん、でも僕も見たいよー。本当、仲いいよね」

罪のない笑顔で、いかにも「少年」といった姿の相手からいわれて、げんなりする。

「仲は悪くない。だが、それ以上でもない。わかっているだろう？
キリヤ」

机に向かいながら、そばで微笑む存在、一応友人の追神桐也オウカミキリヤに答える。

こいつはこんな外見だが、中身は真っ黒だ。よくもまあ、というほ

ど、外見で中身を隠して笑っている。

本人いわく、お姉様受けはいいから、結構外見も重宝しているらしい。敵を潰すには、この脳みそはもってこいだし、と笑っていたのを見て、心底こいつだけは敵に回すまい、と俺は思った。

「……まあ、ヨウは、ね？」

そういったキリヤの声は、幸い俺まで届かなかった。

すたすたと歩きながら、まだひつついてこようとする馬鹿を、今度は蹴りで迎撃する。

派手にそこらの机に突っ込んでいったが、無視。他のクラスメイトも、慣れで笑って見ているか、突っ込まれたヤツは迷惑がって突っ込んだ馬鹿に苦情を並べている。

「ごめんなー」

俺が謝ると、口々に「平気よー」「おう、お前じゃないからなあ」「安栖里くんは気にしなくていいの」とかいわれて、
なので、

「ごめんな、馬鹿が」

というと、口々に「ホント迷惑ー」「突っ込んでくんなよなー」「危ないじゃない！」という返答。

……どうやら、馬鹿は愛されているらしい。

やっと席につくと、そこにはキリヤと馬鹿。

「ひ、ひでえよ、ヨウ」

ぐずぐずと鼻を鳴らして登場した馬鹿は、相変わらず気の強いフリをして、かなりの長身に髪の毛を明るすぎる赤に染めて不良街道まっしぐらな外見の癖に、臆病で気弱だ。

みんながクスクス笑っていていたことにも気付かないで。本当馬鹿。

「なんだ馬鹿」

「よ、ヨウーーーーー」

「うるさい馬鹿」

コイツの精神を鍛えてやるためにも、俺はもう少しコイツを許さないことにした。

けして遊んでるんじゃないし、楽しんでなんかいないぞ、俺は。

「もうそこらへんでいいんじゃない。そろそろSHRが始まるし。ていうか、僕がうるさいんだよ馬鹿」

きつぱりと、笑顔で最後に本音を交えて切り捨てたキリヤに、冷気を浴びた馬鹿が小さくひつと悲鳴をあげて、さめざめと泣き出した。ただし、静かに。

律儀ではあるものの、目障りであることには、変わりはないと思う。

「わかったから、馬鹿イチ！もうお前、自分の席戻れ」

いってやると、ようやっと浮上したのか馬鹿——クジヨウイチ九条壱はバネ仕掛けのおもちゃみたいに跳ね上がって、なんでか喜びながら席に向かつて突進していった。

なんなんだ、アイツ。わけわからん。

馬鹿っていつてゐることは変わってないのに。

「イチは本当に、単純なんだから・・・」

はああ、と深くため息を吐いて、それから俺の顔を見て、もう一度。
なんだ、失礼だな。人の顔を見て。

キリヤも無言で席に戻ってしまったため、俺は朝から気にしないこと
にして、前を向いた。

ほどなくして、担任が姿を見せる。

ふう、と一息ついて。

さて、今日の睡眠時間はどの時間にしようか。

犬のススメ

「……ウ、ヨウ、起きてよ。もう昼だよ」

声に押されて、覚醒する。

「……ミツ？」

「いないから。ったく、なに寝ぼけてんの、らしくない」

キリヤがぼやきながら、すでにくつつけてある机で、購買で買ってきたらしきパンを食べている。

俺は自分が何をいったか理解しないまま、ぼんやり身体を起こした。意識がふわふわしてる。

昨日、遅かったわけでもないのに。

「ヨウ、食べようぜー？俺、腹減った」

なんだか悲しそうに、イチが身体を左右に揺らして、俺にいう。そんなになるくらいなら、キリヤのように先に食べていたらいいと思われるだろうが、それが、まあこのイチ犬の可愛いところだ。

「悪かった。食べよう」

頭が回らないせいか、端的な言葉しか出てこない。

だが、イチは嬉しげに笑うと、ごそごそ自分も弁当を取り出して、ぱくつき始めた。

俺もそれを確認してから、今朝鞆に突っ込んだ弁当を取り出す。と。

「……あれ？」

ない。

弁当箱が、欠片も、姿形痕跡塵一つ、ない。
固まっている俺に、

「おい、ヨウ、どおしたー？」

口にもものを含んだまま、もごもごと喋るイチにも気付かず。

「ヨウが俺をシカトするー」

飯を食べながら号泣する、という外見不良、中身子犬の器用なイチに、キリヤは眉根を寄せて、一言。

「うざいんじゃない？」

「うああー、俺、死にたくなってきた。今死のう、すぐ死のう」

マジな目でいいながら立ち上がろうとするから、「はいはい、いいから座りな、犬」とフォローになってないことを冷たくいう。

「犬じゃない！」と暴れさせて気をそらしたところで、「犬だったら、可愛がつてあげるよ？」と妖艶に笑ってみせる。

その笑みは、年上のお姉様すらイチコロの威力を持つ、大変魅力的なもので。

五月蠅いイチを黙らせるには、とても効果があった。

俺は、そんなやり取りを目の端に捉えながら、頭はめまぐるしく回転してる。

どうしたんだ、今朝、確かに入れた、はず。

ミツに弁当箱を手渡して（最初は当番で作っていたのだが、ミツが極端に朝弱いために、今はほとんど俺が作っている）、外に・・・いや、もしかして台所の棚に置き忘れたか？
だが、袋には入れたはずだから・・・袋？
俺、ミツに手渡すとき、手が空いてなくて、ミツの袋に自分の分もいれてなかったか？
そうだ、それだ！！

がたん、と勢いよく立ち上がると、横でキリヤのいい玩具になっていたイチが、びつくう！と面白く飛び跳ねた。

「お前芸人になれ」

お前のリアクションで世界が取れる。

いうと、イチがきょとん、と目を丸くした。なんかいちいち犬くさいな、コイツ。

と、いかんいかん。

つい、思いが口をついてしまって、本題を伝えるのを忘れていた。

「キリヤ、俺ちよつと弁当とってくるわ」

「え、買いに行くんじゃないくて？」

「おう、ちよつとな」

それだけいって、教室を急ぎ出る。

昼食の時間は限られている。さすがに、育ち盛り（まあ、俺はちよつと育ちすぎだが）の身にはつらい。

俺がいなくなつた後。

「ねえ、俺ほめられた？」

呆然としていたイチが、普段に似合わないテンションで、ぽつりとつぶやいた。

「え、ええー。ああ、うん。まあ」

たぶん。と。

どこまでも歯切れ悪く、キリヤがどういっていいものやら、と思いつつ悩む。

キリヤにも判別しがたかったのだ。

「そっか、あは、そっかあ」

えへへ、とはにかんで嬉しそうに笑うイチは、どうやらその言葉を肯定と受け取ったよう。

外見がいかにもガラの悪い不良だけに、えへへ、なんて可愛らしく笑う姿は、シニールだ。

しかし、それを意外に可愛いと思える自分が嫌で、キリヤは極力見ないようにつとめながら、手に持ったパンをかじる。

どうかこのパンがなくなるまでに、その顔をやめてくれ、と心から願いながら。

「えへ、芸人かあ」

くふふ、と笑い、つぶやく言葉は、指し示された一言。

キリヤは口には出さずに、芸人なんて向いてないだろうに、と思う。もともとが人見知りで臆病で、なのに寂しがりなのだ。コイツは。なのに無駄に顔が整っていたり釣り目だったりししかも口下手だったりしたものだから、あちこちで喧嘩を売られて。

みんなに避けられて、怖がられて、誤解されて。

だから、自己防衛でこんな風になった。

おかしい夢など見ずに、自分らしく、いればいいのに。
犬で、いいのに。

キリヤとヨウ、どちらも異質な存在になつく、馬鹿な犬。
ぼそり、っとキリヤがつぶやく。

「・・・犬、だからな」

情が移るのも、仕方がない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3538k/>

蝶の羽音

2010年10月14日17時38分発行